ISSN 2432-8782

佛教大学
総合研究所報

Research Institute of Bukkyo Univ.

2018.3 No.39

2 巻頭言
4 平成29年度 共同研究活動報告
6 平成29年度 新規共同研究紹介
10 平成28年度 共同研究公開シンポジウム要旨
12 平成29年度 共同研究公開シンポジウム要旨
15 佛教大学総合研究所紀要 第25号 目次
16 佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集 第6号 目次
17 彙報

佛教大学総合研究所

巻頭言

佛大アカデミズムと総合研究所の任務

総合研究所　所長　野﨑　敏郎

私が本学に赴任したのは 1997 年春で、それから 20 年以上が経過し、私学をとりまく情勢の変化を感じるとともに、変わらぬ本学のカラーがあることも感じている。

赴任直後に、学術関連の委員会に所属することになり、諸先輩方のご意見を拝聴しているなかで、「佛大アカデミズム」というタームについて語られていることに新鮮な印象を受けた。その後、いくつかの共同研究プロジェクトに――研究員として、あるいは企画運営サイドに立って――関与したとき、粗漏を許さぬ緻密な文献精査、地を這うような周到な実地調査、手堅いデータ分析にもとづく高度な実証といった「佛大アカデミズム」の特色に触れ、また感化された。

近年は、共同研究の新たな進展がみられるとともに、各教員がますます多忙になるなかで、他大学の研究者をも糾合して研究組織を運営することに、さまざまな困難が増してきた。この問題にたいして適切なサポートをすることも、本研究所の重要な役割である。

さらに、大学における研究活動にたいして、さまざまな社会的要請がなされており、これに応えることも大学人の任務である。そこで、当面、以下の四つの課題に重点的に取り組みたい。

課題 1：常設研究の新機軸

第一に、研究所の企画・発案による共同研究を推進する。

本研究所には「常設研究」が設定されており、それは本学の目的使命に関連した課題について、長期間継続して取り組む性格のものであるが、諸般の事情から、ここ数年この研究課題が実施されていなかった。

本研究所において、「常設研究」の位置づけと新たな研究課題について熟議し、これを、本学の戦略的課題に即して総合研究所が推進する企画と位置づけ、また、いくつかの具体的な研究課題を候補に挙げ、その遂行可能性について検討した。

その結果、次年度より、常設研究として、「南丹市の地域社会と佛教大学の地域連携活動に関する研究」を開始することにした。これは、本学がこれまでに取り組んできた地域連携活動について、多角的に検証し、その今後のあるべきかたちと可能性とを提示しようとするものである。

主たるコンセプトとしては、以下の点が挙げられる。

①可能なかぎり多くの学部・研究科を包括する取り組みとし、全学を挙げた地域連携活動の発展を期する
②検証結果・研究成果を、積極的に外部に発信するとともに、当該地域への研究資源の還元を図る
③研究成果を、本学の教育活動の充実・活性化につなげる

この研究課題は、当面 3 年計画として遂行するが、本学における研究活動と教育活動と地域連携活動とを統一するという大きな目的を有しており、将来的な発展を見込んでいる。

課題 2：各種共同研究の推進

第二に、本学教員スタッフからの発案による共同研究を推進する。

ここ数年の本研究所プロジェクト研究にあっては、貧困と生活支援の問題、人口減少社会への対応、現代における宗教の意義と役割、ネットいじめ、看護・介護にかかわる多職種間連携といったアクチュアルな課題設定のもと、旺盛な研究活動が展開されてきた。そして次年度からは、社会的マイノリティに関する実態調査研究が始まる。本研究所は、こうした活動にたいして、ひきつづき適切な支援をなす。

課題 3：若手教員への支援

第三に、若手専任教員の能力向上を図り、必要な研究支援をすすめる。

若年人口の減少にともない、各大学が、入学者数・学生数管理の厳格化を求められており、またこれに応じて、教員スタッフ数も抑制傾向にあり、本学もその例外ではない。こうした状況下では、とりわけ、これから本学を担うべき若手専任教員の数が少なくなりがちであり、結果として、少数の若手教員にさまざまな任務が課せられるケースが頻出する。

ここで問題となるのは、そうした厳しい状況のなかで、若手が諸事に忙殺されてしまい、その潜在的能力――研究能力と教育能力――を十分開花させることが困難になっていることである。そこで、本研究所は、その管轄下の共同研究において、それが若手教員の能力向上に資するように配慮し、本学全体の研究能力・教育能力を高めていくことを目指すものである。

課題 4：若手研究者への支援

第四に、若手研究者への支援の強化である。これまで、本研究所特別研究員にたいする研究活動支援は、私大のなしうる若手支援として外部からも注目され、実際に、研究能力涵養という点において大きな成果をもたらしてきた。しかし、各特別研究員の活動形態が非常に多様であることもあって、本研究所が開催したサポート企画や研究交流企画に、必ずしも多くの特別研究員が参加することにはなっていなかった。こうした問題を踏まえ、次年度、どのようなサポートが適切であるか、当面、どこに重点的に取り組むのかを検討したい。

また、特別研究員が申請した科研等の採択状況も良好だとは言えない。けっして彼らの研究が劣っているわけではなく、優れた研究成果を挙げているのに、なかなか外部資金を獲得できないでいるのである。どこに申請上の難点があるのかを点検し、適切な助言を与えることにも力を入れたい。

平成 29 年度　共同研究活動報告

■プロジェクト研究
「共生（ともいき）の理念に基づいた保健医療福祉専門職のための IPE プログラムの開発と評価」(3 年目)

研究代表　日隈　ふみ子

研究組織

〈研究員〉

日隈ふみ子　保健医療技術学部教授
伊藤　真宏　仏教学部准教授
漆葉　成彦　保健医療技術学部教授
折坂　義雄　保健医療技術学部教授
苅山　和生　保健医療技術学部准教授
後藤小夜子　保健医療技術学部助教
篠原由利子　社会福祉学部教授
白井はる奈　保健医療技術学部准教授
白星　伸一　保健医療技術学部准教授
菅野　圭子　保健医療技術学部准教授
田尻　后子　保健医療技術学部准教授
得丸　敬三　保健医療技術学部准教授
濱吉　美穂　保健医療技術学部准教授
林　　悠子　社会福祉学部准教授
松岡　千代　保健医療技術学部教授
村岡　　潔　社会福祉学部教授
森安　朋子　保健医療技術学部講師
吉浜　文洋　保健医療技術学部教授
吉見　憲二　社会学部講師
利木佐起子　保健医療技術学部准教授

〈嘱託研究員〉

松岡　克尚　関西学院大学人間福祉学部教授

研究進捗状況

○多職種連携 EOL シンポジウムの実施

テーマ：共生（ともいき）のこころで考える End of Life Care－臨床宗教師・医療福祉専門職者の協働によるより良いケアを目指して－
目的：多死社会における、スピリチュアルな専門家である宗教家も含めた質の高いエンドオブライフケアを実現するための多職種連携実践・教育のあり方について考える機会とする。
実施日時：平成 29 年 6 月 10 日 13 : 00〜16 : 00
場所：紫野キャンパス　常照ホール
講演：釋純寛（慈済大学社会工作学系助理教授）：台湾における臨床宗教師の活動とエンドオブライフケア、大河内大博（医療法人社団日翔会　チャプレン／浄土宗願生寺副住職）：日本における臨床宗教運動とエンドオブライフケア
シンポジスト：杉本浩章（福山平成大学福祉健康学部准教授・社会福祉士・佛教大学研究員）、河本淳史（県立広島病院リハビリテーション科・作業療法士）、小森昌彦（兵庫県但馬県民局但馬長寿の郷地域ケア課・理学療法士）、濱吉美穂（本学保健医療技術学部看護学科准教授・看護師）
参加者：学内外から約 100 名
　なお、本シンポジウムの詳細については『佛教大学総合研究所紀要』第 25 号で報告した。

○多職種連携実践・教育スキルトレーニングの実施

テーマ：グループ・ファシリテーションの理論とスキル（2 日間）
目的：IPW（多職種連携）や IPE（多職種連携教育）においては小集団に対してグループダイナミクスを活用してファシリテートするスキルが求められるため、その習得を目的としたワークショップ形式でのスキルトレーニングを実施した。
実施日時：平成 29 年 7 月 8・9 日 10 : 00〜17 : 00
場所：二条キャンパス　N 1-207
講師：ハワード・カツヨ（カリフォルニア州立大学フレズノ校名誉教授）
参加者：教員・関係者、24 名
内容：ワークショップ形式、2 日間
・1 日目：グループ・ファシリテーションとは何か、「Be・Set・Do」、自己モニター等
・2 日目：グループファシリテーションの中心的スキルの確認とロールプレイ等

○佛教大学の特色を活かした多職種連携教育プログラムの試験的実施と評価

テーマ：「多職種で考える End of Life Care」
目的：エンドオブライフケアをテーマとした多職種連携教育プログラムを開発し、学生に対して試行して評価を行いプログラムの改善を図ること。
実施日時：平成 29 年 9 月 11・12 日　10 : 00〜17 : 00
場所：二条キャンパス　N 1-207
参加者：本学仏教学部、保健医療技術学部理学療法学科・作業療法学科・看護学科、関西学院大学人間福祉学部の学生 24 名。
内容：講義と演習、2 日間
・1 日目：多職種連携についての基本的な理念（講義）、チームビルディング演習、多職種連携コミュニケーション・対人関係スキルトレーニング（TRUE COLORS 入門講座）の実施
・2 日目：宗教家による EOL ケア（講義）、多職種でかかわる EOL ケア（講義と演習）、パーソンセンタードケアについての講義とディスカッション、多職種チームによる EOL 事例の検討と発表
評価：学生からのプログラムへのコメントとして、多職種の考え方の違いが理解できた、他の職種の視点やケア介入方法について具体的に知れた、卒業前に多職種連携を実際に体感することができた等の評価が得られた。また時間の配分やディスカッションの持つ方などに関するプログラムの改善点が確認された。

○理学療法学科・作業療法学科・看護学科 4 回生同ゼミ発表会の開催（昨年度からの継続）多職種連携教育の一環として実施した。

日時：平成 29 年 12 月 22 日 14 : 30〜17 : 00（N 1-207）

研究会等の開催状況

◦第 1 回会議
平成 29 年 4 月 5 日（水）10 : 00〜11 : 30
　今年度予算・計画について、台湾視察報告、総合研究所 End of Life Care シンポジウムについて、学生対象佛教大学の特色を生かした IPE 教育 End of Life Care 教育の実施と検証、教員対象 IPE スキルトレーニングプログラム、IPW 班：精神班の調査について
◦第 2 回会議
平成 29 年 6 月 20 日（火）17 : 30〜19 : 00
　多職種連携 EOL シンポジウムの振り返り、対象グループファシリテーション・スキルトレーニング、学生対象 EOL プログラム、IPW 班：精神班調査について、次年度以降の活動について

平成 29 年度　新規共同研究活動報告

■プロジェクト研究
「大学におけるアクティブ・ラーニングの影響に関する研究」（1 年目）

研究代表　大束　貢生

研究組織

〈研究員〉
大束　貢生　社会学部准教授
高橋　伸一　社会学部教授
的場　信樹　社会学部教授
近藤　敏夫　社会学部教授
大藪　俊志　社会学部准教授
関谷　龍子　社会学部准教授
作田誠一郎　社会学部准教授
山本　奈生　社会学部准教授
吉見　憲二　社会学部講師
〈嘱託研究員〉
長光　太志　本学非常勤講師
全　　炳昊　本学非常勤講師
大窪　善人　本学非常勤講師
牧野　芳子　本学研究員
徳井　公樹　本学修士課程修了
〈学術研究員〉
白石　哲郎　本学大学院博士後期課程

研究組織については、当初メンバーに加え、7 月より本学修士課程修了で教育社会学を専門としている徳井公樹氏を研究員に加え、現在構成員は 15 名となっている。

研究進捗状況

本研究は 2012 年に文部科学省において採択された「大学間連携共同教育推進事業」（以下、大学間連携事業）において佛教大学を含む京都 6 大学がアクティブ・ラーニング（以下 AL）やプロジェクト／プロブレム・ベースド・ラーニング（以下 PBL）、サービス・ラーニング（以下 SL）に基づき「地域公共政策士」「グローカル・プロジェクト・マネージャー（以下 GPM）」の資格課程を運用し 5 年が経過したことを踏まえ、この 5 年間の成果を検討するために、受講学生、大学・教員、学生受け入れ団体・企業への影響をインタビュー及び、質問紙調査と参与観察によって実証的に検討することを目的としている。

このため平成 29 年度では、①「AL に関する動向と理論的検討」、②「大学間連携事業による AL 科目の参与観察の準備・実施」、③「大学間連携事業による AL 科目受講生対象のインタビュー調査の準備・実施」、④「大学間連携事業による AL 科目受講生対象の短期的影響に関する質問紙調査の作成準備」、⑤「大学間連携事業による AL 科目受講生対象の長期的影響に関する質問紙調査の作成準備」、⑥「大学間連携事業による AL 科目開発事務局に対するインタビュー調査の実施」、⑦「大学間連携事業受け入れ団体である地域社会や企業へのインタビューの準備」、⑧「調査結果のまとめ」の計 8 項目について検討を行ってきた。

①の「AL に関する動向と理論的検討」ついては、AL への教育機関の注目を背景として、アメリカ・ヨーロッパの理論・事例研究や、大学の実践例についてとりまとめ、AL の理論的検討を加えた。この研究成果は『佛教大学総合研究所紀要』第 25 号に所収されている。

②の「大学間連携事業による AL 科目の参与観察の準備・実施」については、今年度は特に、龍谷大学、京都産業大学、京都文教大学、同志社大学の 4 大学の AL 科目の参与観察を実施し、各大学の AL 科目運用の共通性や相違について検討を行った。なお、京都大学、京都橘大学、京都府立大学、福知山公立大学については次年度に行うことになった。この研究成果は『佛教大学総合研究所紀要』第 26 号に投稿予定である。

③の「大学間連携事業による AL 科目受講生対象のインタビュー調査の準備・実施」については、佛教大学・龍谷大学・京都文教大学・同志社大学・京都橘大学の AL 科目受講生に受講終了後にどのような学びがあったのかについてインタビュー調査を行った。この研究成果は『佛教大学総合研究所紀要』第 26 号に投稿予定である。

④の「大学間連携事業による AL 科目受講生対象の短期的影響に関する質問紙調査の作成準備」については、これまでの知見及びに AL 科目受講生対象の短期的影響に関する効果（学習アウトカム）測定を行っているいくつかの大学に対する調査を行い、質問項目の作成を行い、佛教大学の受講生に対してプレ調査を行った。次年度は他大学においても調査を行う予定である。この研究成果は『佛教大学総合研究所紀要』第 26 号に投稿予定である。

⑤の「大学間連携事業による AL 科目受講生対象の長期的影響に関する質問紙調査の作成準備」については、大学間連携事業において 2012 年度より終了年度に先行して行っているプレ調査の分析から項目の見直しを行い、佛教大学において調査を行った。この研究成果は『佛教大学総合研究所紀要』第 25 号に所収されている。

⑥の「大学間連携事業による AL 科目開発事務局に対するインタビュー調査の実施」については、今年度は特に龍谷大学、京都文教大学について教職員に対するインタビューを実施し、大学側の変容について考察を行った。次年度以降に同志社大学、京都産業大学、京都橘大学、福知山公立大学、京都大学に対して引き続きインタビューを行う予定である。この研究成果は『佛教大学総合研究所紀要』第 26 号に投稿予定である。

⑦の「大学間連携事業受け入れ団体である地域社会や企業へのインタビューの準備」については、先行して京都ジョブパークを介して連携団体となった企業 6 社にインタビューを行った。また龍谷大学、京都文教大学の 7 団体についてインタビューを行い考察を行っている。この研究成果は『佛教大学総合研究所紀要』第 26 号に投稿予定である。

⑧の「調査結果のまとめ」については、先述の①から⑦までの項目に関して、資料の整理と調査票の整理・分析をふまえ総合的な検討を行った。この研究成果は『佛教大学総合研究所紀要』第 26 号に投稿予定である。

研究会等の開催状況

当研究会は、佛教大学社会学部 PBL 推進委員会（以下 PBL 推進委員会）のメンバーを中心として研究組織を構成しているため、原則的に月例の PBL 推進委員会開催後に研究会を開催した。研究会は原則として公開として開催した。

開催は 4 月 5 日（水）、5 月 24 日（水）、6 月 7 日（水）、7 月 19 日（水）、9 月 13 日（水）、10 月 11 日（水）、11 月 29 日（水）、3 月 1 日（木）であった。

なお、10 月以降下記専門部会の活動が中心となりつつあったため、12 月 20 日（水）、1 月 24 日（水）、2 月 9 日（水）は、専門部会連絡会として開催を行った。

研究の効率化を図るため、①連携企業調査専門部会、②学習アウトカム調査専門部会、③大学間連携調査専門部会の 3 専門部会を設置し研究を行った。各専門部会はそれぞれ月 1 回の頻度で専門部会を開催し鋭意研究活動を行っている。

①の「連携企業調査専門部会」では、特に研究項目の⑦を担い、京都ジョブパークとの連携に基づき、各大学と連携する企業に対してインタビューを行い、企業規模と大学に求める学習効果について分析を行っている。

②の「学習アウトカム調査専門部会」では、特に研究項目の④⑤を担い、首都圏や九州地区において先駆的に学習アウトカムの改善に取り組んでいる大学の事例について調査を行い、大学間連携事業における効果的な学習アウトカム調査の方法について現状の改善を行い、プレ調査の実施や調査票の精査を行っている。

③の「大学間連携調査専門部会」では、特に研究項目の②③⑥を担い、大学間連携大学の AL 授業に関する参与観察やインタビュー調査の実施を行っている。関係する大学すべての網羅的な調査を目指していたが日程上無理が生じたため、年度ごとに重点大学を決定し、集中的に調査を行うこととした。今年度は龍谷大学と京都文教大学を中心に参与観察と受講生、事務局、地域社会へのインタビューを実施し、分析を行っている。

■プロジェクト研究
「東アジアにおけるケアと共生」（1 年目）

研究代表　朴　光駿

研究組織

〈研究員〉

朴　　光駿　社会福祉学部教授
鈴木　　勉　社会福祉学部教授
若尾　典子　社会福祉学部教授
村岡　　潔　社会福祉学部教授
武内　　一　社会福祉学部教授

〈嘱託研究員〉

王　　偉　中国社会科学院研究員（中国）
沈　万根　延辺大学農村研究所所長（中国）
李　仁子　延辺大学公共管理学院准教授（中国）
崔　文香　延辺大学看護学院教授（中国）
魯　大明　韓国保健社会研究院アジア社会政策センターセンター長（韓国）
金　慶鎬　慶南科学技術大学校教授（韓国）
金　賢玉　慶南科学技術大学校教授（韓国）
呉　英蘭　慶南科学技術大学校准教授（韓国）
呉　世榮　圓光大学校准教授（韓国）

研究進捗状況

本研究は、国際比較の観点から中国・韓国・日本における高齢者や障害者などケアサービスの利用者、そしてそのケアギヴァーを含めたケアシステムを明らかにし、共生社会に向けた課題を提示することを研究目的としている。

2017 年度は研究の初年度であるが、各研究員・嘱託研究員に対し 3 年後の研究成果報告を念頭に置いた具体的な研究テーマの提出を要請した。それぞれのテーマの内容については、研究代表が個別的に協議したうえ、最終的研究テーマが定められた。それに基づいて各研究員の責任の下、研究が進められている。

本プロジェクトは、年度 1 回すべての研究員が参加するシンポジウムを開催することになっているが、2017 年度は北京で開催した。シンポジウムの後は、2018 年度のシンポジウムの計画、3 年後の研究成果についての協議が行われ、2018 年度の国際会議は韓国済州特別自治道にて開催することを決定した。

全体として、研究は計画通りに進んでいる。

研究会等の開催状況

本プロジェクトに関わる研究会、研究成果報告会、国際シンポジウムなどは次の通りである。

①国際シンポジウム

2017 年 8 月 14 日～17 日、北京の中国社会科学院で開催された。12 本の研究報告がなされ、研究成果は『第 1 回「東アジアにおけるケアと共生」国際学術会議 in 北京論文集』（159 頁）として公刊された。

②国際学術会議での研究成果報告

第 13 回国際社会保障フォーラム（2017. 9. 16～17、中国南京大学）にて、研究代表と 2 人の嘱託研究員（李仁子・呉英蘭）による研究成果報告がなされた。

③公開研究会

2017 年 10 月 21 日、佛教大学紫野キャンパスで、北京会議の報告を中心に公開研究会が開催され、3 人の研究員の報告がなされた。

④聞き取り調査及び見学会

2017 年 11 月 18 日～19 日の期間中、4 人の研究員が一般財団法人義倉（福山市）を訪問し、福山義倉の設立経緯などについて聞き取りを行った。

国際シンポジウム（中国社会科学院、中国北京市）

公開研究会 1（紫野キャンパス）

国際社会保障フォーラム 1（南京大学、中国南京市）

公開研究会 2（紫野キャンパス）

国際社会保障フォーラム 2（南京大学、中国南京市）

一般社団法人義倉探訪（広島県福山市）

平成 28 年度　共同研究公開シンポジウム要旨

「現代社会における宗教の力」プロジェクト

「死者儀礼の現代的地平へ」

日　時：平成 29 年 1 月 29 日（日）13 : 00〜17 : 30
会　場：常照ホール（成徳常照館 5 階）
参加者：94 名

〈プログラム〉

開会挨拶：榎本　福寿（文学部教授）
趣旨説明：斎藤　英喜（歴史学部教授）
報告：
①「出口王仁三郎と折口信夫の鎮魂」安藤　礼二（多摩美術大学）
②「死者供養文化の潜在力」池上　良正（駒澤大学）
③「東北の被災地から超高齢多死社会へ－死に向き合う臨床宗教師－」鈴木　岩弓（東北大学）
コメント：大谷　栄一（社会学部教授）
総合討論：安藤　礼二、池上　良正、鈴木　岩弓、斎藤　英喜、大谷　栄一
閉会挨拶：榎本　福寿
司会：斎藤　英喜

〈概要〉

佛教大学総合研究所のプロジェクトは「現代社会における宗教の力」をテーマに掲げ、2014 年より研究会、シンポジウムを積み重ねてきた。そのなかで見えてきた課題は、「死に向き合う宗教文化」という言葉であらわすことができる。とりわけ 2011 年の「3・11」（東日本大震災）以降のなかで、多くの死者を出した被災地の人びとにたいして「宗教」がいかなる力を持ちうるのか、という問いかけに向き合うことであった。

たとえばそこから、「宗教」が必要とされながら、しかし現場のなかでは、「宗教（者）」であることを前面には出せない、という矛盾を抱えることも少なくない、という現実も見えてきた。それは「宗教」なるものが、現代の行政や法的な秩序のなかでは、ひとつの「異和」として認識されてしまうことと繋がっていよう。しかし、そうであることで逆に、「宗教」なるものは、近代が作り出した社会のあり方を捉えなおす可能性を秘めていたともいえるだろう。

こうした課題をふまえつつ、「現代社会における宗教の力」の総決算となる今回のシンポジウムは、「死者儀礼の現代的地平へ」というテーマを掲げ、安藤礼二氏、池上良正氏、鈴木岩弓氏をパネラーに招き、これまでの共同研究の成果や課題とクロスさせつつ議論し、「死者儀礼」という実践に注目することで、シャーマニズムや仏教などの「伝統」をいかに再生し、活性化できるのか、という現代的な課題への答えを探った。

またプロジェクトのメンバーである榎本福寿、八木透、大谷栄一、村岡潔、斎藤英喜から、シンポジウムの報告をふまえて、2014 年からの共同研究の総括的なコメントが行われ、「現代社会における宗教の力」というテーマの意義と、今後の課題について議論した。

安藤礼二氏

総合討論

池上良正氏

会場の様子

鈴木岩弓氏

平成 29 年度　共同研究公開シンポジウム要旨
「共生（ともいき）の理念に基づいた保健医療福祉専門職のための IPE プログラムの開発と評価」プロジェクト

「共生（ともいき）のこころで考えるエンド　オブ　ライフ　ケア ～臨床宗教師･医療福祉専門職者の連携による より良いケアを目指して～」

日　時：平成 29 年 6 月 10 日（土）13 : 00～16 : 00
会　場：常照ホール（成徳常照館 5 階）
参加者：105 名

〈プログラム〉
開会挨拶：日隈ふみ子（保健医療技術学部教授）
講演：
①「台湾における臨床宗教師の活動とエンドオブライフケア」
　釋　純寛（慈済大学社会工作学系助理教授）
②「日本における臨床宗教運動とエンドオブライフケア」
　大河内大博（医療法人社団日翔会チャプレン／浄土宗願生寺副住職）
実践報告：
①「共生（ともいき）のこころで考えるエンドオブライフケア　社会福祉士の立場から」
　杉本　浩章（福山平成大学福祉健康学部准教授、社会福祉士／佛教大学研究員）
②「作業療法におけるエンドオブライフケア」
　河本　敦史（県立広島病院リハビリテーション科、作業療法士）
③「地域包括ケアシステムにおける End of Life を考える」
　小森　昌彦（兵庫県但馬県民局但馬長寿の郷地域ケア課、理学療法士）
④「共生（ともいき）のこころで考えるエンドオブライフケア～看護師の立場から～」
　濱吉　美穂（保健医療技術学部准教授、看護師）
パネルディスカッション：
　釋　純寛、大河内大博、杉本　浩章、河本　敦史、小森　昌彦、濱吉　美穂
コーディネーター：
　伊藤　真宏（仏教学部准教授）、松岡　千代（保健医療技術学部教授）
指定発言：村岡　　潔（社会福祉学部教授）
閉会挨拶：漆葉　成彦（保健医療技術学部教授）

〈概要〉
超高齢社会に突入し多死社会を迎えた日本において、国民１人１人が「最期の迎え方」や「望ましい死（Good death)」、すなわちエンドオブライフ（End of Life : EOL）について考えることが求められている。EOL においては、本人・家族の意向を中心としながら、多職種による EOL ケアが必要とされている。EOL ケアでは、特にスピリチュアルケアの専門家である宗教者のかかわりが重要であるとされ、宗教者を含めた EOL 多職種チームによるケアの効果は世界的に報告されている。

本シンポジウムでは、まず台湾の緩和ケア病棟において臨床宗教師として活動している慈済大学の釋純寛氏と、日本で臨床宗教家として仏教の教えを基に EOL ケアに携わっている大河内大博氏の基調講演を行い、その後、日本において先駆的に EOL ケアに取り組んでいる社会福祉・医療（理学療法・作業療法・看護）領域のシンポジストによる実践報告とパネルディスカッションを行った。

釋氏からは、宗教者を含めた先駆的な取り組みを行っている台湾の現状について、台湾の宗教的背景と臨床宗教師が生まれた背景、臨床宗教師の養成課程、役割、実践活動ついての講演があり、現在は様々な緩和ケア病棟・ホスピスにおいて臨床仏教宗教師が活躍の場を広げており、患者・家族へのケアだけではなくケアスタッフのメンタルヘルスへのサポートも重要な役割として認識されてきていることが話された。

大河内氏からは、日本の臨床宗教者の活動は東日本大震災を契機として注目されるようになったが、1980 年代にはホスピス運動やビハーラ運動など、主には緩和ケアの領域において現在の礎となる活動が始まっていたことが紹介された。本学でも 1993 年に仏教看護・ビハーラコースが開設されて 13 期 60 名程度の修了生を輩出しており臨床宗教者の養成に先駆的に取り組んだ歴史があった。また現在の臨床宗教者の養成プログラムは、臨床宗教師、臨床仏教師、スピリチュアルケア師の 3 潮流があることが紹介され、その上で実際的な宗教者の専門性や、医療現場における宗教者の役割は何かという点に関して、今後議論が深まることが期待されていることが話された。

シンポジストの杉本氏は、ソーシャルワーカー（社会福祉士）の立場から、特別養護老人ホームでの EOL ケアと多職種連携に関する調査結果から導き出される社会福祉士の課題と、現在行っている終末期ケア IPW 研修プログラムの紹介がなされた。その上で高齢者施設の看取りにおけるソーシャルワークについて、ミクロ・メゾ・マクロレベルの課題と展望が提示された。

河本氏からは急性期病院における EOL 事例について実際の映像を交えながら紹介がなされ、宗教者の存在は緩和ケア病棟だけでなく急性期の一般病棟にも必要であることが紹介された。その上で EOL ケアにおける作業療法士の役割は、食事や趣味・興味に対するアプローチをとおして本人にとって意味のある作業を行うことであることが話された。

小森氏は、理学療法士として、EOL 期にある重度の障害をもつ高齢者 2 人に対して実施した、環境調整と介護指導、姿勢の改善と本人の意思確認（推測）を継続することによる生活改善の事例を紹介した。その上で地域包括ケアを想定した EOL 期にある人に対する多職種連携は、専門職に共通する知識と技術を共有し、その土台の上に自己の専門性を活かした連携のあり方が提案された。

濱吉氏からは、地域・在宅で暮らす人々の EOL ケアを支えるためには、長い人生の軌跡を線で描きつつ関わること、タイミングを逃すことなく準備をしていくことの重要性として、アドバンス・ケア・プランニングの実践が必要であることが紹介された。

最後に指定討論者として、長年医師の立場から仏教医学や仏教看護の研究に取り組んできた村岡氏から全体をとおしたまとめがなされた。

本シンポジウムをとおして、EOL ケアにおいては、宗教者を含め多職種連携が必須であることが共通に認識され、さらにそのためには本学においても基礎教育の段階からの多職種連携教育が求められることが確認できた。

パネルディスカッション

平成 29 年度　共同研究公開シンポジウム要旨
「東アジアにおけるケアと共生」プロジェクト

「東アジアにおけるケアと共生」

日　時：平成 29 年 8 月 16 日（水）
会　場：中国社会科学院日本研究所　他

〈プログラム〉

基調報告：
①「共生社会（Inclusive Society）の基本原理－福祉（Well-being）・平等（Equality）・平和（Peace）」
　鈴木　　勉（社会福祉学部教授）
②「中国農村における「扶貧」事業の展開－改革開放以後を中心に－」
　王　　偉（中国・中国社会科学院研究員）

「共生社会」セッション
①「共同体の哲学：相互義務システムとしての共同体」
　朴　　光駿（社会福祉学部教授）
②「類的病者論再考～医をめぐる共生関係～：（健常者 vs 病者）あるいは（医療者 vs 患者）」
　村岡　　潔（社会福祉学部教授）
③「韓国における障碍者活動支援制度の争点と課題」
　呉　　世榮（韓国・圓光大学校准教授）

「貧困・子どもケア」セッション
①「2000 年代以降韓国の階層移動と貧困問題」
　魯　　大明（韓国・韓国保健社会研究院アジア社会政策センターセンター長）
②「朝鮮族居住地域における困窮児童の現状と保健対策」
　崔　　文香（中国・延辺大学看護学院教授）

「高齢者ケア」セッション
①「老人自殺率と所得格差及び社会資本に対する近接性評価と分布」
　金　　慶鎬（韓国・慶南科学技術大学校教授）
②「親密性は果たして家族ケアの特徴といえるのか：韓国 A 地域の再婚女性高齢者のケア問題」
　呉　　英蘭（韓国・慶南科学技術大学校准教授）
③「孝文化と高齢者の家族ケアの現在的再構成とケア家族支援政策」
　李　　仁子（中国・延辺大学公共管理学院准教授）

〈概要〉

「東アジアにおけるケアと共生」プロジェクトの研究員及び嘱託研究員は、貧困者、高齢者、障害者、子どもなどのケア問題を専門とする研究員によって構成されている。このシンポジウムは、1990 年代以降、家族主義的伝統の影響で、ケアギヴァーとしての家族も労働参加の機会が制限されるなど、社会的排除の問題に直面している東アジアのケア問題と国際比較の観点から論議することを目的に開かれた。

　各シンポジストはは、自らの 3 年間の研究テーマを念頭に置いた報告テーマを定めているが、シンポジウムでは、基調報告のセッションとともに、ケア領域を共生社会、貧困・子どもケア、高齢者ケアの 3 つのテーマに分けてセッションを設け、論議を深めた。

佛教大学総合研究所紀要　第 25 号

（2018 年 3 月 25 日刊）

目　　次

〈論文〉
石清水八幡宮本『八幡宮寺巡拝記』考 …… 筒井大祐

高等学校におけるネットいじめの実態に関する実証的研究 …… 浅田瞳／原清治

Hearing the Names of the Buddha and the Bodhisattvas in the Pure Land Sūtras …… 肖越

〈研究ノート〉
アクティブラーニングが要請される社会的背景の考察 …… 長光太志

学生の学びはどのように進路意識に影響を与えているのかⅠ
　－就職状況に注目して－ …… 徳井公輝

学生の学びはどのように進路意識に影響を与えているのかⅡ
　－就活生の規範意識と学びとの関係－ …… 大窪善人

学生の学びはどのように進路意識に影響を与えているのかⅢ
　－家庭環境と学習態度との関わりについて－ …… 牧野芳子

〈報告〉
共生（ともいき）のこころで考えるエンドオブライフケア
　－臨床宗教師・医療福祉専門職者の連携によるより良いケアを目指して－
　シンポジウム開催報告 …… 濱吉美穂／釋純寛／大河内大博／杉本浩章／河本敦史／小森昌彦

台湾研修報告 …… 後藤小夜子／濱吉美穂／松岡千代／日隈ふみ子

佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集　第 6 号
－現代社会における宗教の力－

（2018 年 3 月 25 日刊）

目　　次

－死に向き合う宗教文化－

はじめに …… 榎　本　福　寿

〔第一部　神楽と死者祭祀〕

「浄土神楽」と「鎮魂」の解釈史
　－「死に向き合う宗教文化」論のために－ …… 斎　藤　英　喜

神楽における死霊祭祀
　－山口県山代地方の山鎮（やまじめ）神楽について－ …… 井　上　隆　弘

南部藩領内における死者祭祀に関わる神楽の事例 …… 中　嶋　奈津子

浄土神楽と中世芸能 …… 榎　本　福　寿

〔第二部　死者儀礼をめぐる民俗〕

死をめぐる民俗文化 …… 八　木　　透

伊豆諸島の巫俗と死者の口寄せ
　－八丈島と青ヶ島の事例から－ …… 宮　澤　早　紀

死と向き合う民俗信仰
　－流行神とぽっくり信仰－ …… 村　田　典　生

〔第三部　震災と宗教〕

「震災と宗教」に関する研究動向のスケッチ …… 大　谷　栄　一

震災後の仏教に対する評価
　－メディア報道から読み解く－ …… 碧　海　寿　広

現代神道における死後霊魂救済問題を考える …… 権　　東　祐

〔第四部　死に臨む医療〕

死に臨む医療 End of Life Care を担う人々の役割 …… 村　岡　　潔

特養の看取り介護における適応的なフラストレーション反応
　－アグレッションの方向（P-F スタディ）から－ …… 大　西　次　郎

専門職としての宗教的 caretaker とは何か
　－あそかビハーラ病院・看護師へのインタビュー調査から－ …… 福　永　憲　子

彙　報

■平成 29 年度　総合研究所組織

所　　長	野﨑　敏郎					
研究推進機構会議委員	藤井　　透*	田山　令史	三谷　憲正	李　　昇燁	荒井真太郎	
	上田　道明	緒方　由紀	松岡　千代	長谷川順子	森　　智女	
	豊原　和子	岸田稔穂子**	川越　英子**			
運営会議委員	野﨑　敏郎*	田山　令史	坂井　　健	鈴木　文子	大西　正倫	
	越智　淳子	大西　伸江	豊原　和子**			
紀要編集委員	野﨑　敏郎*	田山　令史	坂井　　健	鈴木　文子	大西　正倫	
	越智　淳子	大西　伸江	豊原　和子**			
総合研究所員	大西　伸江	山本　博子				

（*は委員長）（**はオブザーバー）

■平成 29 年度　共同研究

No.	研究名	代表名	研究期間
1	共生（ともいき）の理念に基づいた保健医療福祉専門職のための IPE プログラムの開発と評価	日隈ふみ子	2015～2017 年度
2	大学におけるアクティブ・ラーニングの影響に関する研究	大東　貢生	2017～2019 年度
3	東アジアにおけるケアと共生	朴　　光駿	2017～2019 年度

■平成 29 年度　総合研究所特別研究員

総合研究所では、本学大学院博士後期課程修了者または単位修得満期退学者で、本学において学術研究を希望する研究者に対して、総合研究所特別研究員規程に基づいて特別研究員を募集し、12 名を採用した（採用期間は平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月）。

氏名	研究課題
尾脇　秀和	近世身分格式と二重身分の研究
河本　信雄	田中久重の生涯と久重が手掛けた技術の歴史
熊谷　貴史	荘厳意匠の研究－光背の資料集成と抽象的デザインの考察－
清水　俊史	パーリ上座部における仏説論／聖典観の研究
肖　　越	初期浄土経典成立史の基礎研究－人間学としての浄土教
田所　弘基	日本近代文学と美術の相関に関する研究
田中　夕子	往生人の往生観と作善－往生人源俊房の造堂・仏事を中心に－
筒井　大祐	八幡縁起資料の基礎的研究
手塚　利彰	近世チベット文書「カンカル家文書」の保存・公開と研究
中嶋奈津子	早池峰神楽再考－旧南部藩領における修験系神楽の広がりと変遷－
日置　麗香	戦前期における下谷保青年会の組織と性格
村田　真一	『八幡愚童訓』乙本の「剣璽」について－中世石清水八幡宮における御体と本地の神話言説－

■活動記録（平成29年４月～平成30年３月）

4 月 5 日　大学におけるアクティブ・ラーニングの影響に関する研究プロジェクト　研究会
6 日　総合研究所特別研究員ガイダンス
12日　第 1 回研究推進機構会議
13日　第 1 回総合研究所運営会議
26日　第 2 回研究推進機構会議
5 月11日　第 2 回総合研究所運営会議
17日　第 3 回研究推進機構会議
31日　第 4 回研究推進機構会議
6 月 7 日　大学におけるアクティブ・ラーニングの影響に関する研究プロジェクト　研究会
10日　共生（ともいき）の理念に基づいた保健医療福祉専門職のための IPE プログラムの開発と評価プロジェクト　シンポジウム
15日　第 3 回総合研究所運営会議
28日　第 5 回研究推進機構会議
7 月 8 日　共生（ともいき）の理念に基づいた保健医療福祉専門職のための IPE プログラムの開発と評価プロジェクト　ワークショップ
12日　第 6 回研究推進機構会議
13日　第 4 回総合研究所運営会議
19日　大学におけるアクティブ・ラーニングの影響に関する研究プロジェクト　研究会
26日　第 7 回研究推進機構会議
8 月16日　東アジアにおけるケアと共生プロジェクト　国際シンポジウム
9 月11・12日　共生（ともいき）の理念に基づいた保健医療福祉専門職のための IPE プログラムの開発と評価プロジェクト　学生対象 IPE プログラム
13日　第 8 回研究推進機構会議
13日　大学におけるアクティブ・ラーニングの影響に関する研究プロジェクト　研究会
28日　第 5 回総合研究所運営会議
10月11日　大学におけるアクティブ・ラーニングの影響に関する研究プロジェクト　研究会
18日　第 9 回研究推進機構会議
21日　東アジアにおけるケアと共生プロジェクト　研究会
11月 1 日　第 10 回研究推進機構会議
9 日　第 6 回総合研究所運営会議
15日　第 11 回研究推進機構会議
29日　大学におけるアクティブ・ラーニングの影響に関する研究プロジェクト　研究会
12月14日　第 7 回総合研究所運営会議
20日　第 13 回研究推進機構会議
1 月17日　第 14 回研究推進機構会議
18日　第 8 回総合研究所運営会議
31日　第 15 回研究推進機構会議
2 月22日　第 9 回総合研究所運営会議
28日　第 17 回研究推進機構会議
3 月14日　第 18 回研究推進機構会議
22日　第 19 回総合研究所運営会議
28日　第 19 回研究推進機構会議

■編集後記

『佛教大学総合研究所報』第 39 号をお届けします。ここに報告されている通り、本研究所所管の各共同研究は、旺盛な活動を展開しており、シンポジウム等も有益で、実りのある一年でした。終了した共同研究の研究成果も刊行準備中です。また特別研究員諸学兄も、精力的に研鑽を積んでいます。

本研究所は、今後も、本学の研究活動への支援に努めるとともに、共同研究や特別研究員の活動に関して、必要な点検をなし、適切な改善策を講じていく所存です。　（N）

BUKKYO UNIVERSITY

佛教大学総合研究所報　第39号

発　行　平成30年3月25日
発行所　佛教大学総合研究所
〒603-8301　京都市北区紫野北花ノ坊町96
TEL:075-491-2141（代表）
FAX:075-495-2151（直通）
URL　http://www.bukkyo-u.ac.jp/facilities/labo/